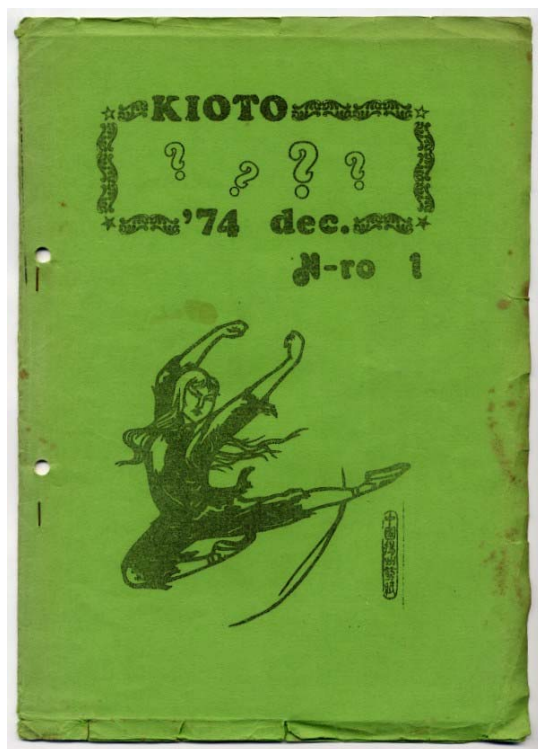


Al Vi Kara

N-ro 100, septembro 2010

La organo de nia societo naskiĝis en decembro 1974. Sed ĝi ne havis sian nomon en la 1a numero. S-ro SAITOO Eizoo, eksprezidanto de nia societo, nomis ĝin "Al Vi Kara", kaj ĝi havis sian nomon ekde la 2a numero en marto 1975. Kaj pasis 35 jaroj; ĝi daŭre eldoniĝis, kvankam la redaktoroj ŝanĝiĝis plurajn fojojn. Finfine ni aperigis la memorindan 100an numeron kun granda plezuro. Ni kore esperas, ke ĝi daŭros multajn dekojn da jaroj ankaŭ de nun.



N-ro 1, 1974-12-13



N-ro 2, 1975-03-31

☆ ENHAVO ☆

エスペラント会館での会合	3 p
Al Vi Kara 100 号を記念して	
Al Vi Kara 100 号を祝い 30 年ぶりにご挨拶 (六郷 恵哲)	4 p
府立勤労会館に集まった人たち (津田 昌夫)	5 p
Al Vi Kara の思い出 (大久保 京)	6 p
Al mi kara "Al Vi Kara" (TAHIRA Masako)	8 p
京都エスペラント会例会場の変遷 (相川 節子)	10 p
Al Vi Kara 1 号~99 号の軌跡 (森川 和徳)	14 p
Ni vigle agadas en Kioto ! (活動報告)	
3 月 17 日 (水) 例会にポーランドとデンマークからのお客様	19 p
3 月 31 日 (水) 例会にアメリカからのお客様	20 p
4 月・5 月の外国からのお客様	21 p
第 58 回関西エスペラント大会への参加	21 p
第 6 回アジアエスペラント大会への参加	23 p
第 95 回世界エスペラント大会への参加	23 p
9 月 1 日 (水) 例会にシンガポールからのお客様	23 p
京都府国際センターでの国際活動パネル展	24 p
エスペラント入門講座	24 p
新会員の自己紹介 (中川 邦彦)	25 p
Malmö, urbo en Svedio (KAWAGOE Kan)	26 p
Fotoj de s-ro Kawagoe	28 p

◆ 編集子より ◆

当初は 6 月に発行予定でしたが、編集作業の遅れで 3 ヶ月遅れの発行となりました。原稿を早めにお送りいただいた皆さんにご迷惑をおかけし、大変申し訳ございません。

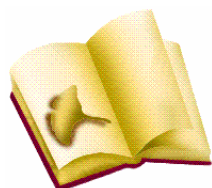
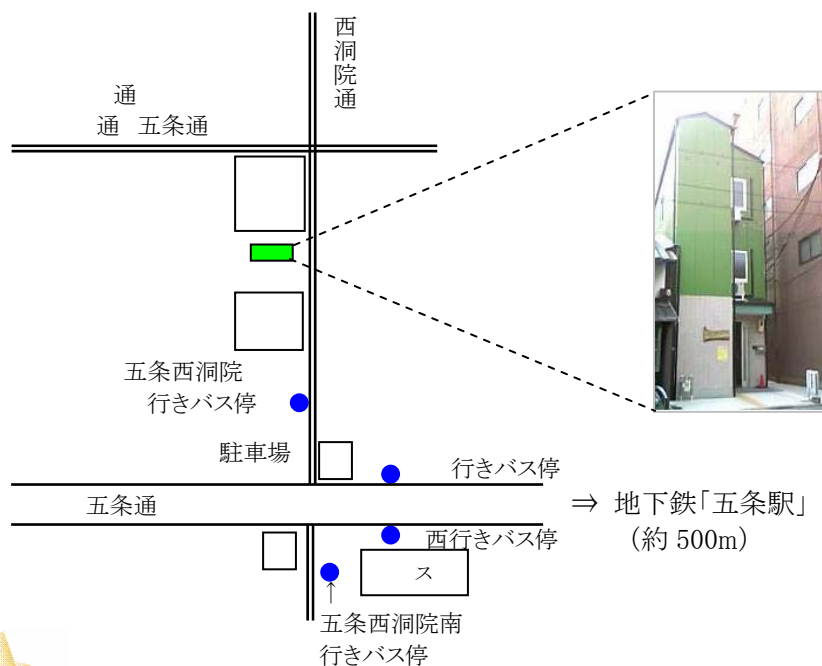
でも何とか 100 号が発行できて大変良かったです。

Al Vi Kara の過去の号を編集されていた六郷さん、津田さん、大久保さんからも原稿をいただきました。また、田平さんと相川さんに Al Vi Kara や例会場について語っていただきました。

(森川)

エスペラント会館での会合

名称	日時			内容
子連れ学習会	毎週	月曜	午前 10～11時半	後藤美和さんが主催。 現在は休止中。
聖書を読む会	月1回	第1月曜	午後 1～4時	相川節子さんが主催。参加者は8人程度。「創世記」を1回に2～3章ずつ読んでいます。1回300円。
エスペラントおしゃべり会	毎週	月曜	午後 7～9時	田平正子さんが主催。参加者は4名程度。外国人が良く参加されます。費用は1回300円。
京都エス会 昼の例会	毎週	水曜	午後 2～4時	参加者は4名程度。
京都エス会 夜の例会	毎週	水曜	午後 7～9時	参加者は7名程度。
Rondo Duopo	不定期			藤本達生・ますみご夫妻が指導。内容の濃い学習会。



Al Vi Kara 100号を記念して

本誌 Al Vi Kara は今号で 100 号を迎えます。これまで Al Vi Kara に関わられた方々からご寄稿いただきました。

Al Vi Kara 100号を祝い 30年ぶりにご挨拶

六郷 恵哲（岐阜）

Al Vi Kara が100号

Al Vi Kara の初期の頃、発行のお世話をさせていただきました。長続きしない「3号雑誌」となることを、当初心配しました。しかし、30年以上続き、「3桁号雑誌」となりました。こころよりお祝い申し上げます。



6月11日で60歳

2010年6月11日に60歳になりました。いろいろな点で、徐々に下降しつつあることを実感しています。しかし、今のところ、何も大きくは変わらないという感じです。今後、同じような感想を持ちつづけたいものです。

エスペラントを知って40年

講習会に参加したのは、大学2年生の秋、1970年の10月頃でした。同じころに大学で学んだロシア語は、使ったこともなく、何も残っていません。しかし、エスペラントで書かれたものは、今でも読めます。エスペラントは、不思議な言語です。

会を離れて30年

広島で生まれ、京都で大学時代を過ごし、岐阜大学に1980年4月に赴任しました。京都エスペラント会を離れて30年経ちました。しかし、会費は、迷うことなく送金しています。Al Vi Karaに寄稿するのは、30年ぶりです。

府立勤労会館に集まった人たち

津田 昌夫（西宮市）

毎週金曜日、会社の終了時刻に合わせ仕事を片付け、いつもよりは早めに会社を出て、十三駅から河原町行きの特急に乗る、そんな習慣を何年続けたらうか。それは一本の電話から始まった。

1975年5月。ある晴れた日曜日の朝。「電話よ」と、家内の声。電話の主は若い女性。「京都エスペラント会で会計をしている八木です。会員名簿でお名前は承知しているのですが、まだお会いしたことがありません。一度、例会に出てこられませんか。関西大会へ参加されませんか。不在参加も出来ます」との趣旨だった。人見知りする私がその京都弁の若々しい明るい声に背を押されて、恐る恐るその例会なるものに出かけて行ったのはその次か、次の次の週の金曜日だったか。あとで分かったのだが、声の主は八木幹子さんで、彼女の『アル・ヴィ・カーラ』のコラム、「会員紹介」への記事のための直撃電話訪問だった。

例会会場は烏丸丸太町（注：記憶が不正確）にあった府立勤労会館の5階（これも、あやふや）の廊下の突き当たりにあった和室だった。茶道や華道の教室用に作られているようで、入ってすぐに4畳半の畳の部屋、奥に床の間つきの8畳大の和室が二つがあった。声をかけて部屋へ入って目にしたのは、8畳の和室を使ってテーブルを囲み集まっていた人たち。春の入門講座の3回目か4回目の授業の最中だった。講師の八木さんに受講生で主婦の光川さん、若い女性の西田さん、京大生の桑原氏。ベテラン・エスペランティストとして、中学校の数学の教師である政本氏と京大大学院生の六郷氏。この顔ぶれの多彩さとサラリーマン生活の退屈さが相まって、私のエスペラント人生が、突然、始まることになった。程なく、京都エス会の重鎮、藤本氏、相川さん、九州から移ってこられた田平さん。もっと後になって、ギターの弾き語りをする同志社大生の加柴君。その多彩さ、多才さは平凡なサラリーマン研究員から見れば目もくらむばかりであった。

私が参加し始め、初めて原稿を『アル・ヴィ・カーラ』に載せていただいたのは第4号（1975年9月）。第1号は1974年12月で、機関誌を出すきっかけはKLEGの事務所に初期のリソグラフが入ったことではないかと思う。この機器でコピーした原稿を電氣的に謄写版の原紙に変え、そのまま高速で印刷できるようになったからではないか。その後、輪番で何度かKLEG事務所へ出かけ、『アル・ヴィ・カーラ』の印刷、製本をした思い出がある。第13号（1977年12月）の編集後記には「師が走るという12月にのんびりとこんなこと（注：印刷・製本作業）してるってトテモステキ」などと能天気なことを書いている。しかし、これらの経験が、後に、つくばのエスペラン

（次ページの下へ）

Al Vi Karaの思い出

大久保 ^{みやこ}京 (亀岡市)

私が Al vi kara の編集を担当させていただいたのが正確には何号から何号までの間であったのか、当時から 7~8 回の引っ越しを経て、今直ぐ手元では確認できません。ただそのきっかけは、初めてのローン組んで、当時の月収のシカ月分をはたいて、シャープのワープロ『書院』を購入したしたこと。(この頃ではこのようなワープロ専用機はとんと見かけませんが…) この重いワープロをでかいバッグに入れてかつぐようにして締切後の編集日に三條大橋付近の喫茶店に集合。届いている原稿、出来上がっている記事などを確認し、配列を検討し目次を作成。そして最後に編集後記の作成。その場で書いていた時もあり、書いて来てある時もあり。

実質的な『編集会議』の流れは以上のようなものでしたが、大ベテラン部員が過去に携わられた編集物に関する話を聞かせてくださったり、編集論とでもいうような？誌面づくりに対する考え方を話し合う場になったり。ちょうど当時は「事務局通信」が独立して発行されるようになり、会報と会誌の機能を分担する事などが議論されていました。会員の名簿を綴じ込みから挟み込みに変えたのもこの頃だったのでは…今では名簿の配布はしていませんね。時代の流れを感じます。

如何にして目を引き魅力ある誌面を作るかという話し合いをしたことも印象に残っています。ヘッダーやフッターを作り、インパクトのあるロゴをつくる。その他、実行できた事もあるし、言うだけに終わった事も。いくら見た目の方面で工夫してみても、発信すべき中身=原稿がなかなか揃わないのが一番の苦しみで、危機的状況だったなァと思い起されます。もちろん、有形無形の会員諸氏のご協力と応援でその都
(次ページへ)

(前ページより)

ト会 (『ブーフォ』) や芦屋エスペラント会 (『ユンカーノ』) での機関誌作りに大いに役立った。

今、あの電話から 35 年、入門講座を開いても人が集まらなくなり、所属しているエスペラント会の機関誌の発行もままならない。エスペラントは自分にとって何だったのだろう。今までどおり、世界共通語としては英国語より優れているんだよ、と声高に叫ぶのは時代錯誤ではないだろうか。周りの人たちに控えめにエスペラントって結構楽しめるよ、ってそっとささやくことが出来る人で良いのではないかと思いはじめています。(2010. 5. 15)

度なんとかならさせていただいて来たわけです。この場をお借りして Mi elkore dankas vin ĉiujn!

さてくだんのワープロはバッテリーを内蔵しておらず (!)、コンセントが使える場所でないとは作業ができません。そこで自宅を深夜の編集作業場として提供して下さいなのが大橋浩史さんでした。京都外国語大学付近の大橋邸まで京都市内を横断し、途中で腹ごしらえや買い出しなどして作業にかかります。といってもキーボードは1つですので、打ち込みをして下さったのはすべて入力に習熟しておられた編集部員の矢野勉さんです。その場でプリントアウトした感熱紙をケント紙の台紙にカバーアップテープで貼ってページを打ったりイラストを添えたりしたのが手作りの版下でした。不馴れで頭をひねったのはその際のページの割り付け作業でした。総ページ数によってページの配置が変わりますし、表裏の組み合わせを間違えては冊子になりません。そこでミニチュアの冊子を作ってページを打ち確認をしながら台紙に貼って行った事を思い出します。この頃ではこんな作業はみんな編集ソフトがしてくれるのでしょうか…?

版が上がれば今度は印刷、幸い勤務先が大学でしたので付近には安価なコピー屋さんがふんだんにあり、一番安いところをと聞き合わせて昼休みや終業後に行きました。左京保健所の裏の辺りに行列のできる?人気店があったような。紙箱ひと箱の大量の紙をバスで持って帰り、自宅にあった長い裁縫台に並べて丁合作業、組めたら折り目を入れてホチキス止め。ハンディな中綴じホチキスを見つけた時は目からウロコっ!という感じで嬉しかったです、それまで普通のホチキスで四苦八苦して作業していましたから。といってもホチキスの針に色を塗ったりして、楽しんでやっていた記憶があります。

綴じが終わればやっと完成!で田平さんにお渡ししていたのか…発送作業の記憶がいまひとつはっきりしません。事務局会議後に出席者で MOVADO の発送を手伝ったりしたのは覚えがあるのですが…。例会などでお手渡しの方もかなり居られたように思いますし、もう終わリー!とばかりにおまかせしてしまっていたのかも知れません。

そんな編集部員生活を突然結婚転居という自己都合で卒業してしまい、京都エスペラント会の幽霊会員-例会にも総会にも行事にも顔を出さない-になってしまいました。学習は細々と続けているつもりではあるのですが、使えると言えるレベルには全然到達せず…いえ、到達の途上でありまして、あきらめずに取り組む所存です。

私の思い出話の当時と今では情報発信を巡る状況が全く変わって来ていますし、会誌としての Al vi kara のあり方も変遷して行くのかもしれませんが。ただ、ここまで継続してきた重みを大切にしたい。積み重ねられてきた来し方を知ることで行く末をどの方向に見定めて行くのか明らかにもなることでしょう。

Mi deziras ke mi daŭre estos leganta “Al vi kara” - n.

Al mi kara "Al Vi Kara"

TAHIRA Masako

En 1974-12-13 aperis en Kioto-Esperanto-Societo (KES) la n-ro 1a de sennoma gazeto kun demandosignoj kaj verda kovrilo. La redaktantoj estis s-inoj Aikawa Setuko, Yagi Mikiko, s-roj Masamoto Norio (bedaŭrata), Rokugoo Keitecu. La japanlingvaj paĝoj estis manskribitaj kaj la esperantaj estis tajpitaj. La presado okazis mimeografe en la oficejo de Kansaja Ligo de Esperanto-Grupoj (KLEG). Tiam mi loĝis en Kitakjuŝu kaj estis membro de Esperanta Societo de Kitakjuŝu.

En 1975-03-31 aperis la n-ro 2a kun la nomo "Al Vi Kara", kiun elektis la membroj de KES en Jarkunsido en decembro 1974, la proponitan nomon de s-ro Saitoo Eizoo (bedaŭrata), ĝistiam prezidanto de KES. Poste la prezidantecon sinsekve plenumis s-roj Haneda Akira (bedaŭrata), Huĝimoto Tacuo, Kawano Kunizoo, Ooŝida Takeŝi, Joel Brozovsky kaj Sasanuma Kazuhiro ĝis nun.

Mi translokiĝis el Kitakjuŝu al Kioto en marto 1975 kaj aniĝis al KES. En la n-ro 3a de "Al Vi Kara" (AVK) eldonita en 1975-06-07 mi debutis per mia unua artikolo.

Ekde la n-ro 4a (1975-09-24) mi helpis la presadon en la oficejo de KLEG veturante kun la redaktantoj per la aŭto de s-ro Masamoto. Mi ne forgesas, kiom spertaj estis la manoj de s-ro Rokugoo en malgrandegaj teknikaĵoj en la redakta laboro malgraŭ tio ke li havas grandan korpon.

La inko foje malpurigis manojn kaj vestojn. Mi kutimis vesti min per nigra vestaĵo, kiam mi vizitis la oficejon de KLEG por preslaboro. Dume mi havis ĝojon proksimiĝi al la estimata esperantisto s-ro Miyamoto Masao (bedaŭrata), kiu deĵoris en la oficejo de KLEG. Lia nepo kaj mia filino naskiĝis en la sama jaro kaj ne mankis komunaj temoj inter ni pri la infanoj.

Poste venis la tempo de fotokopimaŝino. Sen mimeografo ni povis facile presi ekde la n-ro 37a (1983-12-23) kun iom plialta preskosto.

Ĝis la n-ro 69a (1993-11) mi iel aliel kunlaboris kun aliaj redaktantoj (multaj novaj venis, malnovaj foriris alirben). Dume ekde la n-ro 45a (1986-08) en japanlingvaj artikoloj miksiĝis manskribitaj kun tajpitaj. La iniciatinto de la japanlingva tajpado estis s-ino Aikawa. Poste pli kaj pli multiĝis memtajpantoj dank' al la populariĝo de vortoprocediloj (aŭ vortotekstiloj) antaŭ ol la populariĝo de komputiloj.

Ĝis la numero 37a (1983-12) AVK kvarfoje eldoniĝis ĉiujare po 32-56 paĝoj. Ĝis la n-ro 55a (1989-11) trifoje po 24-52 paĝoj. Ĝis la n-ro 57a (1990-11) dufoje po 28-36 paĝoj. Ĝis la n-ro 69a (1993-11) kvarfoje po 32-68 paĝoj.

La redaktantoj pli juniĝis inkluzive de studentoj ekde la n-ro 70a (1994-02). Ĝis la n-ro 73a (1994-12) kvar fojojn po 40-44 paĝoj. Ĝis la n-ro 77a (1996-10) du fojojn po 24-40 paĝoj. Ĝis la n-ro 80a (1997-10) tri fojojn po 24 paĝoj. Ĝis la n-ro 84a (1998-10) kvar fojojn po 24-28 paĝoj. Ĝis la n-ro 90a (2000-10) tri fojojn po 24-28 paĝoj, respektive ĉiujare.

Dume inter 1996-2001 mi plenumis nenian respondecon en KES, ĉar en la unuaj kvar jaroj mi studentiĝis en universitato ĉiuvespere kaj en la kvina jaro mi oficistiĝis en japanlingva lernejo ĉiuvespere. Ekster Esperantujo studi kaj labori tre interesis min.

De la n-ro 91a (2001-09) redaktis s-ro Sasanuma. Ĝis la n-ro 93a (2003-08) unu fojon po 24 paĝoj.

Poste dum kvin jaroj neniu redaktis AVK. Ekde la n-ro 94a (2008-04) s-ro Morikawa Kazunori ĝis nun konstante eldonis tri fojojn ĉiujare po 16-32 paĝoj. Lia redaktaĵoj tre belas eĉ kun koloraj fotoj. Ne nur papere, sed ankaŭ rete oni povas legi la lastajn numerojn. Dankon al li, bonega redaktanto kun moderna tekniko.

Nu, kia estas la enhavo de AVK? Raportoj pri la movado, informoj pri Esperantujo, lernaĵoj, eseoj, kvizoj, tradukaĵoj, leteroj, rakontoj pri eksterlandaj vojaĝoj ktp. Lastatempaj membroj de KES ne scias pri la historio de KES, nek de AVK. Legi malnovaĵojn estas tre interese kaj lernige. Ĉiufoje kiam mi relegas AVK, mi sentas, ke la movado en Kioto herediĝas de generacioj al generacioj.

(次頁の下へ)

京都エスペラント会例会場の変遷

相川節子

編集部より、例会場の移り変わりを書いてほしいとの依頼を受けました。

記憶に基づいて書きますが、不確かなところもあります。会場名はともかく、時期についてはあまり信用せずにお読みください。なお、内容の一部は94号の記事と重複しています。

京都エスペラント会は、1974年まで「京都緑星会」と名乗っていました。

1960年代は京大や同志社大のエスペラントクラブが活発だった時期で、これらのクラブと京都緑星会を含む「京都エスペラント連盟」という組織がありました。ザメンホフ祭のようなイベントだけでなく、定期的な学習会も「京都エスペラント連盟」として行なっていたことがあります。1964年頃、同志社大学のクラブボックス（プレハブの建物でした）で定期的に集まり、そこで斉藤英三さんや竹内義一さんと知り合ったというかすかな記憶がありますが、これは連盟の集まりだったのでしょうか。

1960年代後半の京都緑星会の例会や講習会の会場として記憶にあるのは、協和銀行の会議室と、関西電力の営業所です。協和銀行は七条通りのどこか、関西電力は東山区の今熊野にあったと思いますが、記憶はあやふやです。協和銀行の会議室を借りることができたのは、現在は東京におられる青山徹さんのご尽力でした。フランス人マドレーヌ・オードビンさんがチェ・メトードで入門講座を指導し、たくさんの講習生を集めたのは、協和銀行を会場にしていた時期ではなかったでしょうか。

(次ページへ)

(前ページより)

Mi proponas, ke ni havu ekspozicion de AVK interne de KES okaze de 100-numera jubileo. Jam la papero de malnovaj numeroj bruniĝis kaj malfacile legeblas. Antaŭ ol la pereco de la malnovaj paperaĵoj ni fotokopiu kaj konservu ĉion en arkivo por ke niaj posteuloj povu lerni multon el la pasinta historiaĵo.

Koran dankon al vi ĉiuj, kiuj ĝis nun kunlaboris eldoni mian karan "Al Vi Kara". Hodiaŭ mi vojaĝos al la 6a Azia Kongreso de Esperanto en Ulanbatoro, Mongolio. Mi kunportos la lastan numeron de AVK kun ĝojo prezenti al aliaj partoprenantoj en la Kongreso.
(2010-06-17)

京 都 初等講習会が 9 月 24 日から
始まった。毎金 6 時半から、
10 月 8 日までは協和銀行東山支店、その後は
関西電力今熊野 サービスステーションで 12
月 10 日まで行なわれる。講師はオードヴィ
ン女史。直接教授法を使っている。受講者約
40 名。京都新聞、朝日新聞、NHK 等で開
催のニュースをながしていたのと、U. K.,
I. J. K., P. K. のため好調であった。中級は毎
月曜 7 時から 同志社大部室で開催している。
(青山記)

(左)

La Revuo Orienta
1965 年 12 月号の記事

青山徹さん(東京都練馬区)
からの情報提供

* * *

確実な記憶は京都府立勤労会館（今のハートピア京都、烏丸丸太町）での例会からで、1970 年代にはここで集まっていました。津田昌夫さんが「2ヶ月ごとに新しい入門講習をしよう」と提案、自ら講師になって有言実行、会の活性化に貢献されたのはこの時期です。

当時、地下鉄はまだなかったが、市の中心部に近くバス停のすぐ前でもあり、とても便利な会場でした。

便利だということは、それだけ競争相手が多いということです。例会日のちょうど 2ヶ月前の朝 8 時半に申し込まないと部屋がとれません。今も多くの公設の会場がそうですが、電話申込はできませんでした。つまり、毎週決まった日の朝 8 時半に勤労会館へ行かなければならないのです。会員の中で比較的時間の自由がきく学生さんがその任にあたりました。わたしのいちばん古い記憶では六郷恵哲さんが、六郷さん卒業後は松田克進さんや三宅栄治さんらが場所取りをしてくださいました。ほかにも、わたしの知らないところで、会場申込の努力をなさった方がおられたことでしょう。

* * *

1980 年、会員の丸岡共子さんから、「マンションを買って京都エスペラント会の事務所兼例会場に提供したい」という申し出がありました。この時、提案されたマンションはまだ着工しておらず、設計図だけしかありません。今なら、完工しても売れ残っているマンションがよくありますが、当時は青田買いが普通だったのでしょう。

皆でいろいろ話し合い、ご好意を受けることに決めました。これが 1981 年から 1988 年まで（事情で中断した時期はあったが）京都エスペラント会の所在地となった、通称「サローノ」です。堀川御池の「メイゾン御池」というマンションの 2 階でした。

このマンションのおかげで、例会の場所取りの苦勞がなくなりましたし、さまざまな文書や備品をここに保管しておくこともできました。毎週の例会のほかに「中級学習会」や「ザメンホフを読む会」が始まったのも、この部屋があつてこそでした。1984年、第32回会関西大会を京都で引き受けた時には、さまざまな実務を遂行する上で、自前の事務所を持つありがたさを痛感しました。

このマンションは、当時まだ珍しかったオートロックでした。外部の人間であるわたしたちが暗証番号を教えてもらうわけにはいきません。つまり、持ち主の丸岡さんが来なければ、ほかの会員がマンションに入れない。わたしがこのことに気づいたのは、例会場として利用を始めたあとでした。何があつても定時に来なければいけないというのは、丸岡さんにとってとても大変なことだったと想像します。

マンションですので、例会には好都合でも、一般市民対象の講習会には不適です。幸い、すぐ近く、二条城の北側に「京都社会福祉会館」があり、そこで入門講習をやって、講習生が慣れたところでサローノへ来てもらいました。

* * *

丸岡さんのご病気でサローノを閉鎖してからは、例会場を京都市青少年活動センター（西洞院七条下る）に移しましたが、ここでまた、毎週の場所取りという仕事が復活しました。以前の勤労会館とちがい、夜の時間帯にも申し込み可能だったので、今度はわたしが仕事の帰りに毎回部屋の申し込みに行きましたが、部屋がとれず近くの喫茶店で例会をしたこともありました。（なお、現在この施設はありません。）

そのうち、当時三条花見小路にあった語学学校「京都アイリスアカデミー（後に京都国際アカデミーと改名）」の部屋を使わせていただけるという幸運に恵まれました。この語学学校を運営しておられた黄泰淵（ファン・シェンタイ）さんが高槻エス会の竹内義一さんと懇意で、黄さんご自身もエスペランティストだったので、ご好意に甘えることができたのです。

決まった部屋をかなり自由にに使わせていただき、会所有の本なども置かせていただきました。会場が語学学校なので、入門講習をするにも好都合でした。ここでは、毎週の例会とは別の日に、竹内義一さんの指導で中級講座も開かれました。

毎月の会報「事務局通信」を始めたのは、当時学生だった喜多敏博さんですが、この会場を使っていた時期だったと思います。

* * *

東洞院松原の相川宅が例会場になったのは、1997年頃です。最初は月1回の事務局会議にだけこの家を使い、例会は国際アカデミーで続けていました。ここは築年不詳のボロ家ですが、個人の家なので、資料だけでなくパソコンやコピー機が置けます。折しも宇治谷チョコラさんから高額の寄付をいただき、それでコピー機を買いました。また、プリンターを寄付してくださる方、こたつやらビデオデッキやらを届けてくださる方など、会員のみなさんのおかげで備品が揃い、使い易い例会場になりました。

実は自分の家でありながら、いつから例会に使ったか、正確な時期を覚えていません。わたしは整理が苦手で、手元に事務局通信のバックナンバーが揃っていないのですが、1998年8月号には、「事務局住所とからふね屋熊野店の二カ所で並行して勉強会を行っています」と書かれています。熊野神社のそばの喫茶店「からふね屋」の奥に談話室があり、そこでも講習会や例会を行っていたのがこの時期です。

不思議なことに、例会場を東洞院松原に移した直後、三条花見小路にあった京都国際アカデミーが、すぐ近くの松原室町に移転して来られました。そこで、再び黄さんのご好意により、この語学学校を入門講習の会場に使わせていただきました。（その後京都国際アカデミーは上京区に移転しました。）

なお、Al Vi Kara 77号（1996年）には、わたしが東洞院松原の家を入手した個人的なきさつを書いています。

* * *

そして2007年2月から、現在のエスペラント会館が例会場になりました。

この建物については、94号で詳しく紹介しました。ここは貸会議室で、エスペラントのための施設ではありません。でも、「エスペランティストが集まる安定した会場を」というのも、この会館を作った目的のひとつです。

サローノを利用させていただいた時期、会が自由に使える事務所があるありがたさを実感すると同時に、個人の所有物を借りるときの不都合も知りました。持ち主が元気な間しか使えないこと、持ち主が来ないと中に入れないこと、などです。

エスペラント会館も個人の持ち物であることに変わりはありませんが、ビジネスとしての貸会議室にしたことで、わたしに何かあっても相続人がひきついてくれる可能性が出てきました。あくまで可能性で、確実なものではありませんが。

以前は、ここで本の販売もしたいと考えていましたが、関西エスペラント連盟の当直を手伝った時、「本の仕入れや在庫管理はたいへんな作業で、とてもわたし一人でやれる仕事ではない」と思い知りました。でも、基本的な辞書（日エス、エス日）だけは、ほしい人にすぐ買っていただけるように1部ずつ置いてあります。ご希望があればお申し付けください。 (2010.5.20)



Nia domo moviĝis tie kaj ĉi tie.

Al Vi Kara 1号～99号の軌跡

森川和徳

光川澄子さんから1号からのバックナンバーをお借りし、これまでのAl Vi Karaの発行履歴をまとめてみました。多数の方々のご努力で発行が継続されていることがよくわかりました。

右列の特記事項に一部の連載や記事を書いています。これは今後の活動で必要と私個人が判断したものです。

謄写印刷時代（1） ※KLEG 事務所にて輪転機で印刷

N-ro	年	月日	頁数	特記事項
1	1974	12/13	26	<ul style="list-style-type: none"> ・KES 会長は斉藤英三さん。 ・Al Vi Kara 創刊号。第1号は会誌の名称が未定。 ・連載翻訳「りゅうのなみだ Larmoj sur la okuloj de Drako」エスペラント訳、1号～5号（相川節子さん）
2	1975	3/31	24	<ul style="list-style-type: none"> ・KES 会長は羽根田 明さん。 ・会誌の名称がAl Vi Kara（いとしいあなたへ）に決定。名付け親は、前会長の斉藤英三さん。 ・会の名称も「京都緑星会」から「京都エスペラント会」に変更。「緑星会」は愛称となる。 ・3号に、北九州から京都に転居された田平正子さんがエスペラント文を寄稿。
3		6/07	30	
4		9/24	30	
5		12/14	32	
6	1976	4/17	32	<ul style="list-style-type: none"> ・KES 会長は藤本達生さん。 ・羽根田 明さんが亡くなられ、7号は追悼特集。 ・第24回関西大会を5/29-30 京都会館・一燈園で開催。 ・連載翻訳「猫は生きている La katoj vivu!」、7号～13号（相川節子さん） ・連載記事「Mi amas vin --- Vi amas min」、8号～29号（津田昌夫さん）
7		7/28	44	
8		10/16	40	
9		12/12	40	
10	1977	4/10	40	<ul style="list-style-type: none"> ・11号に関西大会の出し物の台本。 ・12号の記事「会員を50人以上に、例会出席者をいつも15人以上はあるように」（津田昌夫さん） ・13号の記事「なんで例会に行くの？」（田平正子さん）
11		6/02	40	
12		10/09	36	
13		12/11	44	
14	1978	3/17	44	<ul style="list-style-type: none"> ・14号の記事「Al Vi Kara について書いておきたいこと」（六郷恵哲さん）
15		6/03	44	
16		9/30	48	
17		12月	56	

謄写印刷時代（2） ※KLEG 事務所にて輪転機で印刷

N-ro	年	月日	頁数	特記事項（敬称略）
18	1979	3/24	48	<ul style="list-style-type: none"> ・ 20 号の記事：第 66 回日本大会（8/11-12、神戸）に長谷川テルの子息が参加したことの投稿記事が京都新聞に掲載。
19		5/26	52	
20		9/30	51	
21		12月	44	
22	1980	3/07	48	<ul style="list-style-type: none"> ・ 22 号の記事：5/26 放映の長谷川テルに関する日中合作ドラマ「望郷の星」。 ・ 24 号の記事：アメリカ、中国、ハンガリー、韓国、イスラエルからの多数のお客様。
23		5/24	44	
24		9/24	52	
25		12/15	40	
26	1981	3/01	56	<ul style="list-style-type: none"> ・ 26 号の記事：丸岡共子さんの提供により、京都エスペラント会のサローノ（Salono）誕生。「メイゾン御池」205 号室。（京都市中央区御池堀川東入る） ・ 27 号の記事：サローノに多数の外国からのお客様（3月～6月で23人）
27		7/11	48	
28		9/30	48	
29		12/6	40	
30	1982	3/31	38	<ul style="list-style-type: none"> ・ 30 号と 31 号の記事：Jam pasis unu jaro サローノの利用状況（八木幹子さん）
31		6月	52	
32		10月	36	
33		12月	52	
34	1983	3月	32	<ul style="list-style-type: none"> ・ 35 号：日本語エスペラント辞典の発行予告
35		6月	44	
36		秋	32	

コピー印刷（1） ※原稿をコピー機でコピー

N-ro	年	月日	頁数	特記事項（敬称略）
37	1983	12/23	32	<ul style="list-style-type: none"> ・ 37 号からコピー印刷方法に変更。印刷費用は数倍になったが、紙面が大変読みやすくなる。
38	1984	4/20	44	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第 32 回関西大会を 6/9-10 に京都府青年会館で開催。 ・ 39 号の記事：斉藤英三さんのこと（田平正子さん）
39		9/22	44	
40		12/16	52	
41	1985	3/19	32	<ul style="list-style-type: none"> ・ 41 号の記事：KES-anoj havis ekskurson. 大文字山に遠足。（相川節子さん） ・ 連載記事：Fragmentoj el Esp.Movado en Kioto 42 号～43 号（川野邦造さん）
42		7/26	36	
43		11/15	40	

コピー印刷（２） ※原稿をコピー機でコピー

N-ro	年	月日	頁数	特記事項（敬称略）
44	1986	4/20	28	<ul style="list-style-type: none"> ・連載記事再開「Mi amas vin --- Vi amas min」、44～46号（津田昌夫さん） ・46号：11/16 付け毎日新聞に田平正子さんのご家族を紹介する記事が掲載。
45		8/22	28	
46		12/14	32	
47	1987	4/30	24	<ul style="list-style-type: none"> ・ワープロ専用機の普及により、手書き原稿からワープロ原稿が増える。 ・波多野恒雄さんが亡くなられ、48号は追悼特集。 ・エスペラント発表 100 周年のワルシャワ世界大会に KES から 7 人が参加。 ・斉藤英三さん（元会長）が享年 87 歳で亡くなられ、49号は追悼特集。 ・連載記事「旅は道草」49号～54号（藤本達生さん）
48		7/14	20	
49		11/05	40	
50	1988	2/15	32	<ul style="list-style-type: none"> ・連載記事「旅は道づれ・子づれのハンガリー」50号～64号（田平正子さん） ・52号の記事：ザグレブ市での I J K（国際青年エスペラント大会）報告。ザグレブ市長の招待により姉妹都市代表として田平正子さんが京都市長よりメッセージを託された。
51		7/09	32	
52		11月	40	
53	1989	2/24	28	<ul style="list-style-type: none"> ・53号：丸岡共子さんのご病気により、事務所をサローノから田平正子さん宅（京都市伏見区）に移す。 ・54号：田平正子さんの転居に伴い、京都市左京区に事務所が移る。
54		6/16	40	
55		11/17	32	
56	1990	3月	28	<ul style="list-style-type: none"> ・第 38 回関西大会を 6/30-7/1 に立命館大学末川会館と仁和寺御室会館で開催。 ・56号の記事「みなさん、ごくろうさまでした」「たかが大会 されど大会」（京都での関西大会について）
57		11月	36	
58	1991	2月	36	<ul style="list-style-type: none"> ・KES 会長に川野邦造さん。 ・59号の記事：Adiaŭ, Salono! [サローノの歴史]（田平正子さん）
59		4月	32	
60		7月	32	
61		11月	32	
62	1992	2月	56	<ul style="list-style-type: none"> ・63号：4/7 付け京都新聞に藤本達生さんを紹介する記事が掲載。 ・連載記事：「つくば日記」63～68号（津田昌夫さん） ・64号：連載記事「旅は道づれ・子づれのハンガリー」（田平正子さん）14回目で最終回。1993年に「おまけの旅・ハンガリー」として出版される。
63		6月	40	
64		8月	40	
65		11月	48	

コピー印刷（3） ※原稿をコピー機でコピー

N-ro	年	月日	頁数	特記事項（敬称略）
66	1993	2月	60	<ul style="list-style-type: none"> ・68号の記事：俄か講師10回講習会奮闘記（光川澄子さん） ・69号はAl Vi Kara100号の歴史で最大の68頁の分量。会員多数が寄稿。
67		5月	56	
68		8月	64	
69		11月	68	
70	1994	2月	40	<ul style="list-style-type: none"> ・KES会長に大信田丈志さん。 ・71号の記事：「女のフェスティバル」参加報告（安江美和さん） ・72号の記事：第42回関西大会の劇の脚本（大信田丈志さん） ・73号はAl Vi Kara 20周年記念特別号。
71		4月	40	
72		8月	40	
73		12月	44	
74	1995	5月	28	<ul style="list-style-type: none"> ・連載記事：「実用単語術」74号～77号（大信田丈志さん）
75		10月	24	
76	1996	8月	24	<ul style="list-style-type: none"> ・KES会長にJoel Brozovskyさん。 ・大信田丈志さんの提供により、京都市左京区の大信田さん宅に事務所を移す。 ・連載記事「エスペラントとインターネット」76号～79号（笹沼一弘さん） ・77号：「集会場提供のいきさつ」（相川節子さん）
77		10月	40	
78	1997	2月	24	<ul style="list-style-type: none"> ・78号：12/13付け京都新聞に、ザグレブ市へ戦災孤児慰問のための絵はがきにKESの協力でエスペラント訳を付けるという記事が掲載。 ・相川節子さんの提供により、京都市下京区の相川さん宅に事務所を移す。 ・連載記事「おまけなしの旅・ポーランド」79号～87号（田平正子さん） ・連載記事：「AL VIA KOR'」80号～84号（加柴浩二さん）
79		8月	24	
80		10月	24	
81	1998	1月	28	<ul style="list-style-type: none"> ・84号：「京都北絵手紙友の会」第二回展にザグレブ内戦被災児慰問絵手紙を展示。 ・84号：10/31-11/1「町衆文化フェスティバル」参加
82		5月	24	
83		7月	28	
84		10月	24	
85	1999	1月	24	<ul style="list-style-type: none"> ・87号：6/20地下鉄醍醐駅の上にある商業施設パセオダイゴローでエスペラント展示会を開く。
86		4月	24	
87		7月	24	

コピー印刷（４） ※原稿をコピー機でコピー

N-ro	年	月日	頁数	特記事項（敬称略）
88	2000	2月	28	<ul style="list-style-type: none"> ・ KES 会長に笹沼一弘さん。（2000年～現在まで） ・ 89号：Ĝis revido, karaj!（前会長 Joel Brozovsky さん） Joel さんが ELNA（北米エスペラント連盟）勤務となり帰国。送別会を開く。
89		6月	24	
90		10月	24	
91	2001	9月	24	<ul style="list-style-type: none"> ・ 5/30 朝日新聞「あいあいA I 京都」に写真入り記事が掲載。 ・ 連載記事：「お客の受け入れあれこれ」91号～93号（田平正子さん） ・ 記事：京都エスペラント会の沿革 1974～2000年 ・ 記事：京都エスペラント会規約
92	2002	4月	24	<ul style="list-style-type: none"> ・ 記事：「全世界エスペラント国初演 ザグレブでひろげた大風呂敷」（光川澄子さん）
93	2003	8月	24	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2月から例会日を祝日の多い月曜日から水曜日に変更。 ・ 記事：「2002年度入門講習広報記録」（光川澄子さん）

プリンタ出力

[メールで送られた原稿を編集し、パソコンから直接プリンタ出力]

N-ro	年	月日	頁数	特記事項
94	2008	4/21	32	<ul style="list-style-type: none"> ・ 5年ぶりの発行。 ・ 表紙は、京都エスペラント会のブログ ・ 特集：シーズ交流会「エスペラントで知る各国事情」 ・ 特集：2007年東京・世界大会の感想 ・ 記事：京都のエスペラント会館について（相川節子さん）
95		7/23	20	<ul style="list-style-type: none"> ・ 表紙は、祇園祭りの山鉦の写真。
96		12/24	20	<ul style="list-style-type: none"> ・ 表紙は、国際活動パネル展の写真。
97	2009	4/22	16	<ul style="list-style-type: none"> ・ 表紙部分4頁をカラー印刷。表紙は桜並木。 ・ 特集：「なぜエスペラントをやっているのか」 ・ 連載「ABZ kiel gastigi」97号～現在（田平正子さん）
98		9/23	32	<ul style="list-style-type: none"> ・ 表紙は、世界大会での暗算の講習会 ・ 特集：「私のエスペラント学習法」
99	2010	2/24	24	<ul style="list-style-type: none"> ・ 表紙は、第3回ボランティア市民活動フェスタでのエスペラント展示。 ・ 特集：「私の好きな本」
100		9/22	28	<ul style="list-style-type: none"> ・ 100号記念号。

★ Ni vige agadas en Kioto ! ★

このコーナーは、京都エスペラント会の月刊の活動情報紙「事務局通信」（川越 幹さん編集）やブログ（http://d.hatena.ne.jp/esperanto_kioto/）の記事を元に、主な活動を紹介するものです。

★ 3月17日(水)例会にポーランドとデンマークからのお客様

En la vespera kunveno ni havis du gastojn. S-ro Tadeusz Adam Lezak, pola eksbiokemiisto, turisme vojaĝas en Japanio. S-ro Mathias Dalmose, dana studento, nun loĝas en Kameoka kaj studas la japanan lingvon kaj pri Japanio. Ili parolis pri sia lando kaj pri sia intereso pri Japanio. Ni miris, ke ili ambaŭ tre bone scias pri Japanio.

今日はふたりのお客様を迎えました。Lezakさんはポーランドの生化学者で、観光客として日本にやってきました。Dalmoseさんはデンマークの学生で、亀岡市に滞在し、日本語と日本文化を勉強中です。おふたりとも日本のことをよく知っておられて一同おどろきました。
(相川 節子)



他ロンドからの来訪者を合わせて、計14人の出席者でした。



左から、Lezak さん、相川さん、Dalmose さん

★ 3月31日(水)例会にアメリカからのお客様

En la vespera kunveno ni havis gaston el Usono: s-ino Renata Kaczmarska-Photakis, polino nun loĝanta en Novjorko. Ŝi estis dungita de UN pro ŝia kapablo pri la rusa lingvo. Nun ŝi havas edzon el Grekio. Internacia familio! Ni aŭskultis pri la urbo Novjorko kaj tieaj esperantistoj. Ŝi diris, ke ĝi estas kosmopolitana urbo kun riĉa verdaĵo. Ŝi parolis rapide, kaj tamen klare aŭdeble.

夜の例会に、アメリカからのお客様を迎えました。ポーランド出身で、今はニューヨークにお住まいの Photakis さんです。ロシア語がたんのうなのを買われて、国連に職を得たそうです。夫君はギリシャ人とのこと、国際ファミリーですね！ニューヨークの町について、またニューヨークのエスペランティストたちの活動についてお話を聞きました。ニューヨークはいろいろな国や民族の人たちが友好的に暮らしていて、緑も豊かなところだそうです。けっこう早口ですが、明瞭で聞き取りやすい話し方でした。



左から
中川さん、光川さん
Photakis さん、田平さん

★ 4月・5月の外国からのお客様

- ・ S-ro Franck Bourgeois (フランス) 5/12(水) 京都エス会・例会
- ・ S-ino Valentin Seguru (ロシア) 4/26(月) おしゃべり会
- ・ S-ro Nikolao Raymond (フランス/ノルウェー在) 5/15(土)
- ・ S-ro Suchada Punpruk (タイ) 5/15(土)

★ 第58回関西エスペラント大会への参加

La 58a Kongreso de Esperantistoj en Kansajo

- ・ 日時 2010年6月5日(土)～6日(日)
- ・ 場所 奈良県立文化会館(奈良市)
- ・ 参加者 205人(実参加者149人)

公開講演会への一般参加 約40人

京都エスペラント会および関係者の参加者(五十音順、敬称略)

相川節子、川越幹、後藤美和、笹沼一弘、出口ゆかり(不在参加)

田平正子、津田昌夫、中川邦彦、浪川光代(不在参加)、藤本達生

光川澄子、森川和徳、山内利郎、山本鳩江

S-ro Morikawa lekciis pri la temo “Kiel konservi datumojn longatempe?”

森川さんのミニ大学での講演

「データの長期保存方法について」



撮影：堀田裕彦さん(枚方)

S-ro Sasanuma prezidis la fakkunsidon de Universitateto

笹沼さん(中央)が分科会

「ミニ大学」で司会



撮影：川越 幹さん



← 撮影：竹森浩俊さん

S-ino Tahira prezidis la kunsidon por paroli kun s-ro Wang, gasto el Ĉinio

田平さん(左)が王さんとの会話を司会



撮影：林 庄三さん (奈良)

S-ino Micukaŭa kantis kiel membro de la korusa grupo "Heliko"

光川さん(中央)がコーラスに参加



撮影：川越 幹さん

S-ino Tahira gajnis la premion de KLEG pro sia aktiva agado

田平さん(左)がKLEG賞を受賞



撮影：堀田裕彦さん (枚方)

S-ino Aikawa gajnis la premion por la konkurso de opinioj pri Zamenhof

相川さん(左)がザメンホフ感想文コンクールで入賞



S-ino Aikawa estis prezentita kiel ĉefo de la organiza fako de KLEG

相川さん(右から二人目)はKLEG組織部長として紹介されました。

撮影：堀田裕彦さん (枚方) →



★ 第 6 回アジアエスペラント大会への参加

La 6a Azia Kongreso de Esperanto (AK)

6月19日(土)～23日(水)にウランバートル(モンゴル)で開催され、27カ国から206人が参加しました。日本人は75人が参加。

京都エスペラント会からは、田平正子さんと小橋良太郎さんが参加されました。

★ 第 95 回世界エスペラント大会への参加

La 95a Universala Kongreso de Esperanto (UK)

7月17日(土)～7月24日(土)にハバナ(キューバ)で開催され、59カ国から1002人が参加しました。日本からは81人が参加。

京都エスペラント会からは、田平正子さんが参加されました。

★ 9月1日(水)例会にシンガポールからのお客様

夜の例会に、Frank Stephan(ドイツ・シンガポール)さんと Meimei Loh さん(美美籠、シンガポール)が迎えました。お二人は婚約者です。



左から

山本さん、田平さん、Meimei さん、Frank さん、中川さん、相川さん

★ 京都府国際センターでの国際活動パネル展

Panela Ekspozicio pri Esperanto en Kioto-gubernia Internacia Centro

- ・日時 9月1日(水)～9日(木) 午前10時～午後5時
(最終日は午後4時まで)
- ・場所 京都府国際センター(京都駅ビル9階) 府民交流サロン



成田和子さんが外国の方に説明

撮影：あらいとしのぶさん(岡山)

★ エスペラント入門講座

Enkonduka Kurso de Esperanto en Kioto-gubernia Internacia Centro

- ・日時 9月4日(土) 午後2時～4時
- ・場所 京都府国際センター(京都駅ビル9階) 会議室
- ・講師 川越さん
- ・参加者 初めの方1人、本会会員4人
- ・概要 本「地球時代のことば エスペラント」(土居智恵子著、A4判、186頁、価格800円、右図は表紙)を参加者に購入していただき、この本をもとに説明。また、7月18日のテレビ番組「サンデーモーニング」でのエスペラントを説明する場面のビデオも上映。



<新会員の自己紹介>

中川 邦彦 (なかがわ くにひこ、京都市左京区)

昭和44年頃だと思います。エスペラントの講習会の案内が京都新聞に出了ました。大本の信徒のはしくれで、エスペラントの名前は知っていましたので、早速参加することにしましたら、当時、羽根田先生も初めて参加されていました。又、京都タワービルに外国人専用の観光案内所があり、そのの所長さんも来られていました。当時のメンバーで顔を少し覚えていたのは、相川さんと八木さんでした。今回、始めに相川さんの顔を見て、なつかしく思い出しました。

羽根田先生は、洛陽工業高校で社会を習ったことがあったので、顔と名前は知っていました。エスペラントの出来の悪い私は先生とバスや電車で会わないことを願っていました。なぜなら、どこで会っても大きな声でエスペラントで話してこられるので、理解出きにくい私は恥ずかしかったからです。

私が再度エスペラントに挑戦した理由は、大本信徒らしきことをなにも出来ていませんので、せめて世界中からエスペラントで京都に来られた方々を1泊でも2泊でも我家に泊まっていただき、休んでいただけたら良いなと思っています。信仰が異なっても、エスペラントチストは全て世の為・人の為に活躍されている方々ですので、少しでもお世話させていただくことが、私が大本人としての御用と思います。

本当は、Pasporta Servo に名前を登録出来れば幸いかなと思いますが、会話が出来なくて、書いてあることが少し理解できる程度のエスペランチストでは無理がありそうです。

京都エスペラント会に来られた方々を少しでもお世話させていただける様にガンバります。今度は、尻切りとんぼにならない様に、エスペラントを続けて勉強していきます。



Sciuro manĝas glanon.

Malmö, urbo en Svedio

KAWAGOE Kan

Mi korespondas kun maljuna svedino daŭre ĉirkaŭ tri jarojn. Ŝi estas esperantisto, kiu loĝas en la urbo Malmö en Svedio. Malmö estas tre malnova urbo de haveno. Ŝi iam havis travivaĵon en Japanujo, kompreneble en Kansajo.

Do mi prezentas pri cirkonstanco kaj kutimo pri la urbo.

En Svedio, nuntempe, 24% el ĝiaj loĝantoj naskiĝis ekster Svedio. En la urbo ĉirkaŭ 100 lingvoj estas parolataj.

Malmö situas ĉe sudo, vidalvide de Kopenhago en Danio, kun kiu ĝi nuntempe estas ligita per ponto.

Tie troviĝas interesaj kutimoj, sed ne ridindaj.

Unue, oni diras ke la ponto estas “La Ponto de Amo”. Dania regsitara havas severan leĝon pri enmigrado. Danoj, kiuj geedziĝis kun fremduloj, ne povas loĝi en sia lando. Pro tio, ili devas loĝi en Malmö en Svedio. Kaj ĉiun tagon transirante la ponton, ili laboras en daniaj kompanioj ktp. Tial la ponto estas nomata “Amo”.

Alia problemo laŭ ŝia letero estas, ke multaj kokcinoj atakas la lokon amase kiel nuboj somere, kaj poste invadas la maron ĉirkaŭ ŝia urbo. Blujaj meduzoj nomataj orelmeduzoj manĝas amase kankrojn dum aŭgusto. Oni ornamas kaj pentras kankrojn sur la ĉapeloj, buŝtukoj, kandeloj, ktp. Ofte oni aranĝas eĉ konkurson sur la granda placo en la urbo.

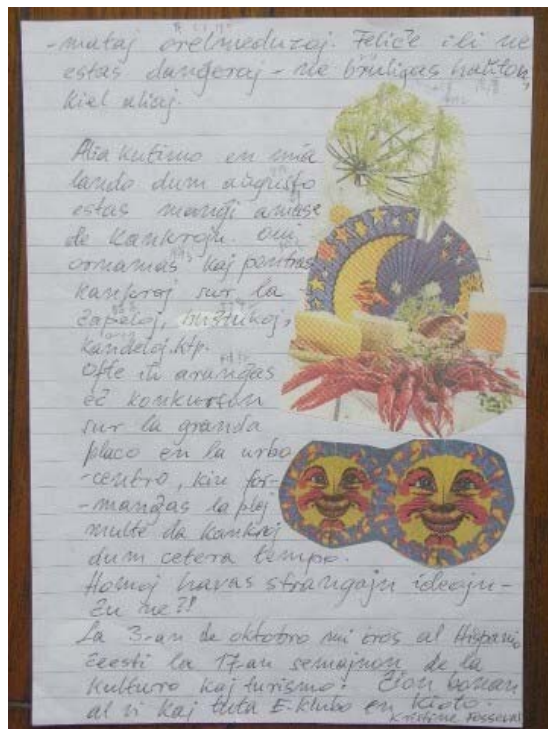
Malmö gastigis la 33-an Universalan Kongreson de Esperanto en 1948, kaj la 40-an Kongreson de SAT en 1967.

注) kankro ザリガニ kokcino てんとう虫
meduzo クラゲ



Danio Malmö

スウェーデンの文通相手からの手紙



Fotoj de s-ro Kawagoe



En la printempo de la nuna jaro, ŝipo kun 30 kokuoj (*) estis denove konstruita por la funikularo nomata “Sosui Inkurain”, kiu estis metita interspace de la lago de Biwako ĝis Kioto.

Noto: Japana malnova unuo.
1 kokuo egalas al ĉ. 180 litroj.



Turistoj ĝojas enŝipiĝi en la ŝipon kun 30 kokuoj sur la kanalo de “Sosui” en la parko de Okazaki en Kioto. La kanalo estis malfermita en 1890 (la 23a en Meiji-epoko) intencante multajn celojn: produkti elektron, konduki akvon kaj ruligi urban fervojon ktp.

Al Vi Kara N-ro 100, eldonita en la 22a de septembro 2010

京都エスペラント会 Kioto-Esperanto-Societo

◎事務局

〒600-8455 京都市下京区西洞院五条上る八幡町 537-6 エスペラント会館

電話・FAX : 075-958-2475 (川越 幹)

ブログ : http://d.hatena.ne.jp/esperanto_kioto/

電子メール : esperanto_kioto@yahoo.co.jp

会費 : 正会員 年 7,200 円 準会員 年 3,600 円

Al Vi Kara 購読費 年 1,000 円

ゆうちょ銀行(郵便)振替口座 : 01000-4-9895 口座名 : 京都エスペラント会

◎Al Vi Kara 編集局

連絡先 : 〒618-0071 京都府乙訓郡大山崎町大山崎尻江 13-8 森川和徳

電子メール : kz_morikawa@yahoo.co.jp

ファックス : 075-955-1627

本誌 PDF ファイル保管 : <http://cid-843fe5eeb586235d.skydrive.live.com/summary.aspx>